

令和元年度 会派調査研究報告書

(視察先 1 箇所につき 1 枚)

会 派 名	石合祐太
事 業 名	視察「まいにち子ども食堂高島平について」
事 業 区 分	研究研修 調 査

1 上田市での課題と研修・調査の目的

子ども食堂が全国的に注目されるようになり久しいが、上田市でも複数箇所において子ども食堂の運営が行われている。運営体制も多種多様で、創意工夫を凝らした運営を行っていただいているが、金銭的支援の必要や食材の安定的な調達などに課題があるのも事実だ。

東京都板橋区に正月やお盆を含む毎日三食提供しているNPOがあると聞き、運営方法や上田市の子ども食堂が直面している課題解決につながる手法、行政としての関わり方などを学ぶ目的で調査を行った。

2 実施概要

実施日時	視察先	東京都板橋区
令和2年2月19日 11:00~13:00		NPO法人ワンダフルキッズ
報告内容（感想、市政に活かせること）		

1. 視察先の概要

2011年経済的困難にある家庭の子供たちの貧困の連鎖を断ち切るべく学習支援の場として開設。活動をしていく中で、満足に食事がとれていなかったり自己肯定感が低いなど学習以外に支援が必要な子供や若者の来所が多くなり、まずは子どもたちが「安心して過ごせる場」が重要だととらえた。週に1回や月に2回という頻度では根本的な解決にまではならないと議論し、子供たちが生きていくために必要な食事を365日毎日提供することにした。



2. 視察事項について

(1) 立ち上げから現在までの経緯について

2011年からNPOで無料の学習支援を行ってきた。幅広い年代の子どもや複雑な家庭事情を抱えた子どもが参加してくるようになった。

【ワンダフルキッズ
六郷理事長と】

こうしたことから、食事面でも支えていく必要を感じ、2016年から板橋区前野町で子ども食堂をスタートさせ、地域の方々と運営を担うようにした。2018年3月1日から高島平の現在地にまいにち子ども食堂を開設した。

(2) 運営体制・ボランティアの募集方法等について

ボランティアによる自主運営、登録ボランティア 40 名、恒常的参加は 10 名程度、板橋区在住者中心。

運営に関わる方は理事長ほか 6 名。

ボランティア募集は、NPO ボランティアセンター(現在は社協)にボランティア登録したほか、SNS の活用、ホームレス支援をおこなっている「てのはし」によびかけ、大学生への呼びかけなど。

子どもの参加は口コミによるものが多数。運営費は 1 万円/日前後。

(3) 利用者の状況について

利用者は 35 人/月平均 内訳は 20 名程度が子ども、15 名程度が大人

(4) 助成金・補助金の状況について

子どもの未来応援団(内閣府) 370 万円、一般寄付 220 万円、東京都子ども食堂補助金 24 万円、オリックス 30 万円、赤い羽根共同募金 20 万円

単年度の補助金も含まれるため、資金繰りについては年度ごと検討している。

(5) 食材調達の状況について

米については寄付で相当程度賄えている。野菜は近くのスーパーなどからの寄附もある。

肉・魚については購入が中心だが、近所の問屋からの寄附もある。

(6) 長期休暇中の対応について

通常通り、開所している。普段と違う子どもの参加が見られる。

(7) 支援が必要な子どもを支援に繋げた事例について

板橋区役所から紹介を受け、当所を訪れる方もいる。また、子どもの情報提供により訪れた子で支援を必要としながらつながっていなかった子に気づいたケースはあった。

板橋区社会福祉協議会を中心に、「子どもの居場所連絡会」として区内 22 カ所の子ども食堂運営者や 4 カ所の学習支援拠点の運営者、行政とで定期的に会議を行い、情報共有を行っている。

(8) 運営上の課題について

大学生の年代の精神障害や発達障害を抱える利用者の方が増え、子どもとのトラブルも出ている。福祉制度につなげてはいるが、その中には板橋区外から来られている方もおり、受け皿となる居場所が少ないことが課題である。また、恒常的なボランティアの方のうち、半数は年配の方であり、担い手の確保も重要である。

(9) 行政との関わりについて

社協が日常的な窓口である。板橋区は子ども政策部管理課が補助金申請のための窓口である。

【まとめ（上田市に活かせること）】

昨今は街中で遊ぶ場所や子どもの居場所そのものが少なくなっていることや子どもの貧困が社会問題となっていることもあり、今後重要性を増してくることがお話を伺い、整理できた。

貧困対策として重要なものであり、複数箇所が一自治体内にあることで子どもにすれば居場所の選択肢を増やすことになり、行政としての関わりをどのように構築していくか、今回お話を伺った事例と上田市での状況を精査し、今後の政策提言につなげていきたい。

また、大人の利用者を巡る課題については子ども食堂で完結することでないと思われることから、福祉的なセーフティネットのあり方を考える必要がある。

令和元年度 会派調査研究報告書

(視察先 1 箇所につき 1 枚)

会 派 名	石合祐太
事 業 名	視察「農福連携の実践について」
事 業 区 分	研究研修 調 査

1 上田市での課題と研修・調査の目的

農福連携は、障害者等が農業分野で活躍することを通じ、自信や生きがいを持って社会参画を実現していく取組である。

農福連携に取り組むことで、障害者等の就労や生きがいづくりの場を生み出すだけでなく、担い手不足や高齢化が進む農業分野において、新たな働き手の確保につながる可能性もあることは、農林水産省も示している。

具体的実践を通じ、働く場としての農業と働き手としての障がい者をつなぎ、売り上げにもつなげている NPO 法人を訪ね、課題の整理と可能性について調査を行った。

2 実施概要

実施日時	視察先	埼玉県さいたま市岩槻区
令和 2 年 2 月 19 日(水) 午後 16 時 ~ 18 時		特定非営利活動法人ひな

報告内容（感想、市政に活かせること）

1. 視察先の概要

就労継続支援 B 型事業所。開所は平成 16(2004)年 7 月 28 日。旧岩槻市初の精神障害者施設。

2. 視察事項について

(1) 法人立ち上げの経緯について

・家族会が中心になって岩槻区で精神障がい者に特化した作業所をという要望が高まり、補助金を得て立ち上げられた。

(2) 運営体制について

・所長、サービス管理者、生活支援員、就労支援員、目標工賃達成指導員。そのうち、精神保健福祉士、社会福祉士が一人。

・「メンバー」として精神障がい者 20 名が登録。障がいの程度に合わせた作業を行っている。

トラクター操作、収穫作業、体力によってはブログ更新作業など。



(3) 作業所の活動内容について

- ・ 工賃単価が低くなる室内作業所でのゴム製品のバリ取り仕上げ、布巾の梱包など
- ・ 室外作業として農作業、駐車場清掃など、外出プログラムや日帰り旅行、家族の集いなど。
- ・ 農作業実施面積は5反ほど。

(4) 生産する農産物の内容について

岩槻ネギ、ブロッコリー、ワサビナ、オータムポエム、じゃがいも、小松菜、ハーブ等
右図は作付けのイメージ図



(5) 農作業に取り組む効果について

- ・ 報酬が多いと笑顔が見られる。
- ・ 一定程度の生活費の足しになるだけの収入は得られる。

(6) 地域との関わりについて

- ・ 地元スーパーに野菜を「ひな野菜」(右写真)として出荷している。生産量が少ないことから現状は1店舗だが、今後増やしていきたい方向である。
- ・ 畑をお借りし、作業中にお話したりなど交流の場になっている。



(7) 補助金について

- ・ 赤い羽根共同募金、須崎財団
250万円のトラクターを100万円ほどの持ち出しで購入できたこともあった。

(7) 今後の課題について

- ・ 立ち上げ時の目標工賃達成指導員が退職し、売り上げが落ちてしまったこと。
引き継ぎ職員の能力向上と売り上げの回復、学校給食への出荷と規模拡大。
また、農作業をしたい新規の利用者を増やすことも課題である。

【まとめ(上田市に活かせること)】

農業というソーシャルワークに障がい者を能力に応じ、関わりをつくった経緯が参考になった。
また、地元スーパーでの販売といったビジネスの軌道にのせることも農福連携事業においては重要なことだと改めて認識できた。

受け入れ施設側の状況と安定した売り上げ確保の整理を進めながら、今回の調査を教訓に上田市への提言に活かしていきたいと考える。